吉野川お散歩紀行

藍の花　藍の館

ブラックティー　藍住町バラ園

写真提供:藍住町役場経済産業課

正法寺川とみどり橋

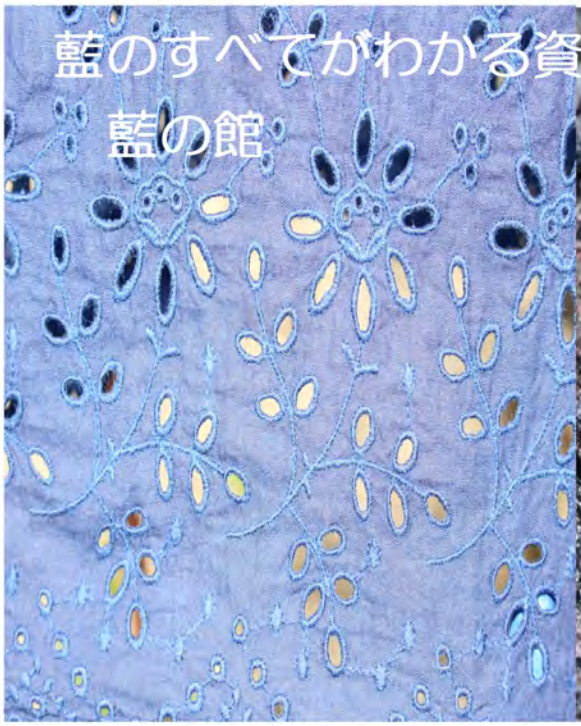
バラの咲く町、藍(愛)の町 藍住町

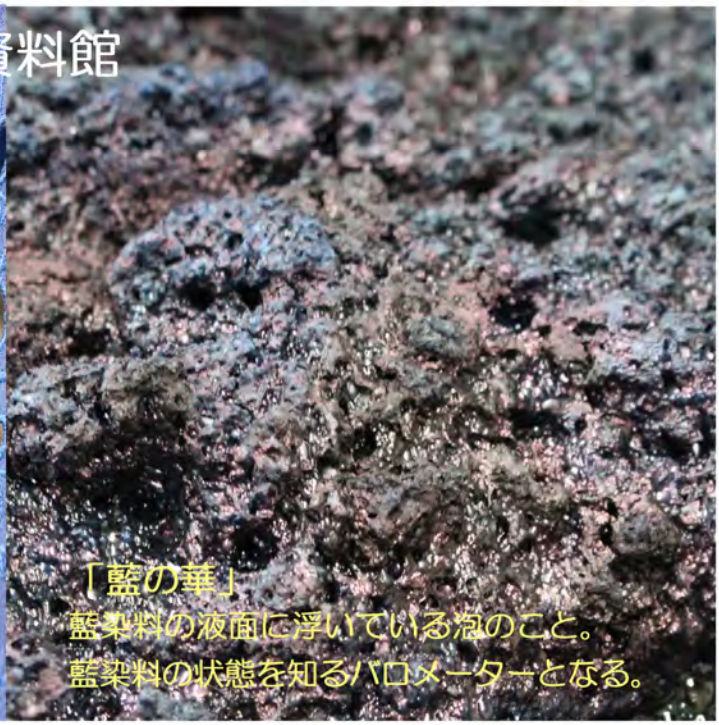
徳島県の北東部に位置している板野郡藍住町。吉野川の流れに面し、町の北側には旧吉野川、中央には正法寺川(しょうほうじがわ)が流れる。徳島市の中心部までは、5kmから10km圏内。通勤や通学の便もよいベッドタウン。住民の平均年齢も全国で有数の若さだ。

昭和30年に藍園(あいぞの)村と住吉村が合併してできた藍住町。その名のごとくかつては、藍の一大生産地であった。毎年のように、洪水を起こす吉野川。洪水が来る前に収穫できる阿波藍は、吉野川が運ぶ肥沃な土壌や藩の保護政策もあり発展した。町内に残る藍屋敷は、その歴史を今に伝えている。藍住町徳命にある日本でただひとつの藍の博物館『藍の館』では、連日問い合わせの電話がひっきりなしにかかる。2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックで藍色の『組市松紋(くみいちまつもん)』が採用されてからは、日本国内のみならず、海外からの観光客も急増しているという。

藍の伝統と歴史が息づく町、未来を担う子どもたちの声があふれる町、美しいバラの花が咲く町。観光スポットがいっぱいの藍住町。あなたもこの秋訪れてみてはどうだろう。

藍のすべてがわかる資料館
藍の館





「藍の華」
藍染料の液面に浮いている泡のこと。
藍染料の状態を知るバロメーターとなる。

江戸時代から、明治時代中期にかけて徳島を代表する特産であった藍。「阿波25万石、藍50万石」と言われていた。吉野川流域は全国一の藍作地帯であり、吉野川が毎年のようにもたらす肥沃な土壌は、連作を嫌う藍の栽培にも適していた。良質の藍が生産されていた藍住町。

敷地内にある藍商屋敷と藍こなし人形。屋敷内の様子をそのまま見ることができる。

「藍の館」は、藍豪商であった奥村家屋敷の13棟の建物が昭和62年に徳島県の有形文化財に指定され、11代当主奥村武夫氏から13万点にもおよぶ奥村家文書も藍住町に寄贈されたことを機に、平成元年8月に開館した。貴重な資料の恒久的保存と学術的利用、藍の専門博物館として阿波藍の知識を普及し、藍の生活文化の創造と藍の情報センターとしての役割を担っている。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの公式エンブレムでも話題となった藍色「ジャパン・ブルー」。これを機に藍の歴史を知りたい、藍染体験をしようと地元だけではなく、香港、台湾、ヨーロッパなど国内外からより多くの人々が訪れるようになった。外国人が訪れない日はないほどだ。特に香港では、SNS等を通じて、日本のおすすめ観光スポットとして友達から友達へと口コミで紹介され、人気が高いという。

ご自身の服装も藍の館で染めたもの。
藍の館館長　阿部利雄さん。

藍の館のオープン当初から関わってきた館長の阿部さん自身も、「藍の色に魅せられてというか、自然の青の美しさにのめり込みました」と語る。藍の色の名前の由来も教えていただいた。例えば「甕覗(かめのぞ)き」。藍色の淡い色で水色の薄い色がついたような色。「少し甕を覗いた程度」の淡い色である

藍染体験場。50人まで一度に体験することができる。

藍染体験のハンカチのサンプル。自分だけの作品づくりができる。

ところから名付けられたという。また、濃い藍色のことを「かちいろ」といい、褐色（かちいろ）、搗色（かちいろ）、勝色（かちいろ）など様々な字があてられている。「勝つ」という縁起を担ぎ、鎌倉時代から武具などにも好んで使われていた。藍染は、何度も藍染料につけては絞って干し、空気に触れさせ染めていく。その際、緑色から段々と藍色に染まっていく。「緑色は落ちてしまうが、藍色は残るので、藍色が勝つ」というところからも名付けられているそうだ。色の名前を聞くだけでも、藍の持つ色の魅力と奥深さが分かる。藍にまつわる話を聞いているだけで、あっという間に時間が過ぎていく。藍に魅せられた館長の分かりやすく、興味深いお話を聞くことができた。

地元の子どもたちも社会科の勉強や、職業体験で大勢やってくる。子どもたちからのお礼状も楽しみのひとつだ。大人になってから、県外の友達を連れて藍染体験に訪れたりと、館長の思いは、子どもたちにも確実に伝わっている。

館長の後継者の一人として思いを受け継いでいるのが高原さんだ。藍染体験場の責任者として、藍液の管理や、藍染体験の指導を担当している。藍液にうかぶ藍の華を見て、その元気さが分かるという高原さん。色、においなどから、状態を判断する。かき混ぜる回数を考え、発酵を促し濃い状態に保つために、ブドウ糖やお酒を加えることもある。年末年始も藍液の様子が気になって確認をしている。始めは「どうやって藍が染まるのか知りたい」というところから勤務を決意した。現在は、藍染めの魅力を多くの方に知ってもらうため、奮闘する日々だ。

「藍染をどんどん身につけてほしい」と語る藍の館課長　高原洋子さん。

藍の館 展示の数々

写真左と中央：河野操さんから寄贈された、阿波藍の栽培から藍染めの製造工程などすべてがわかる紙人形の一部。
写真右：江戸時代の貴重な藍染の雨衣、道中着など。歴史館には伝統的な着物や流通関係資料、古文書等も展示。

藍の館　※「藍住町バラ園」についても地図上に表示

〒771-1212　徳島県板野郡藍住町徳命字前須西172
TEL:088-692-6317 FAX:088-692-6346
開館時間：9時～17時　藍染体験：9時～16時
休館日：火曜日（祝祭日は開館）12月28日～1月1日
入館料金：大人300円 中高200円　小学生150円
団体割引：２０名以上あり
藍染体験：ハンカチ、ストールなど各種
染め物持ち込みによる藍染め体験もできます。
(木綿･麻･シルクに限る) 1g15円～要予約

バラの香りに包まれて
バラ園を支える人々

大久保明さん。「最近は、バラ園に来た人がSNSにあげてくれるから、それを見て多くの人が来てくれます」と笑顔。
バラの香りは、水に溶け出すので、空気中の水分が多い朝が特に香りが強いと教えてくれた。

バラ園の全景。品種が豊富なので、好みのバラが見つかる。秋のバラまつりは、11月3日(金)から11月12日(日)まで開催。写真提供:藍住町役場経済産業課

「ここにくる人は、みんな笑顔。バラを見に来る人で怒っている人はいないですよ」と言う大久保明さん。シルバー人材センターから派遣され、このバラ園の手入れや管理を任されてもう12年以上になるという。ご自宅では、バラを育てて25年。まさに藍住のバラ博士だ。取材日は、バラの剪定講習会。参加者から質問攻めにあい、丁寧に答えていた。

このバラ園は、昭和54年に開園。320種1,100株のバラが植えられている。春と秋の開花期には、多くの来園者で賑わう。今年、春のバラまつりには、35,000人もの人が訪れた。

手入れしているのは、大久保さんを含めて、シルバー人材センターの方2名と、ボランティアの方2名、大久保さん以外は、すべて女性だ。「バラまつりの日に、お客さんにすごい、きれいって言ってもらえるとうれしい」と笑顔で話してくださった。

「バラは、3日ほっておくとだめになる」大久保さんが言うように、このバラ園でも日々の手入れがかかせない。年末年始以外は、ほぼ毎日(ボランティアの方は、毎週水曜午前)手入れをしているという。花がら摘み、剪定、草抜き、消毒、つるバラの誘引などその作業は多岐にわたる。冬剪定の後には、一袋20kg、160袋もの肥料やりの仕事が待っている。また、今年は雨が少なく、カイガラムシが異常発生。貝殻をくだいたような虫がバラの茎にびっしりとこびりついてしまった。この虫を茎の一本一本歯ブラシでこすり取る。この作業にも一本30分から1時間を要する。

このようなスタッフの力があってこそ、美しいバラの花が咲く。このバラ園でお話を伺っていると、自分自身も心おだやかで笑顔になってくる。ぜひ、皆さんもバラ園を訪れ、バラの香りに包まれてほしい。

バラ園ではボランティアを募集中!バラの好きな方はぜひ、藍住町役場経済産業課までお問い合わせを!!

バラの剪定講習会の様子。春には、バラの育て方講習会が開かれる。

藍住町バラ園(年中開放)
板野郡藍住町矢上字原263-88
問い合わせ先　　藍住町役場経済産業課
Tel:088-637-3120
地図は、藍の館の頁参照。

川づくり まちづくり

正法寺川（しょうほうじがわ）を考える会
会長
米田　博さん

今年で20周年。地域と連携を深め、大人と子どもが高め合い学び合う集団に

写真左:「20年、正法寺川とデートしてきました」笑顔の米田会長。
写真右:大人も子どもも一緒になっての清掃活動の様子。
活動写真は、正法寺川を考える会提供。

藍住町のほぼ中心部を流れる正法寺川は、吉野川に流れ込む一級河川。生活排水が流れ込み、町の中心を流れていながら、人々にとって親しみのない川だった。正法寺川は、住民が共有できる地域財産。『その川辺が美しくなれば、散歩する人も増える』そう思って始めた、月に一度の清掃活動が会のスタート。平成9年10月に活動を開始し、今年9月10日で20周年を迎えた。

活動の大きな柱のひとつに行政や学校など地域との協働がある。藍住町役場には、正法寺川の担当課があり、担当の職員もいる。月に一度の清掃には、役場職員も参加。一緒に清掃を行う。また、当日のゴミを袋に詰め、どんな種類のゴミがあったのか集計するのは、会の役目。その後のゴミ処理は役場が担当と、役割がはっきりと分かれている。平成17年からは、毎年藍住北小学校4年生に正法寺川をテーマにした環境学習を企画提案、1年間で60時間近いプログラムを会と学校が協働し、児童が主役で学び合う。川沿いを歩いてのフィールドワークや『野鳥』、『魚』、『川調べ』、『水質』調査や、ボートを使っての観察など多岐に渡る。会のメンバーには、水質調査のプロもいて、分かりやすく子どもたちに説明している。毎年2月には学習発表会を開催、「食器の汚れは紙でふきとり汚水はできるだけ流さないようにする」など、子どもたちなりの改善策も発表される。学習をきっかけに会に入会し、早朝の清掃に参加している子どももいる。

このように、20年の時を重ねて、行政や学校との協働でボランティアの新しい形を切り開いてきた正法寺川を考える会。メンバーがその時、その時にできることを、手応えを感じながらやってきた。環境学習をした子どもたちは、正法寺川をふるさとの川と思い、どこにいても思い出す。それぞれが藍住町の担い手となり、この町を育てていく。

子ども会員だった少年は、大人会員に昇格した。長年活動してきた84歳の女性はこのたび会を卒業した。正法寺川とともに、それぞれの人生、それぞれのストーリーが生まれた。

多くのストーリーがまた、町を作り、藍住町の歴史となり刻まれていく。

正法寺川を考える会

詳しい活動内容は、ホームページをご覧ください。